

浄土

1988—1

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可）
昭和二十四年四月二十八日（輸送省特別郵便物認可）
昭和六十二年十二月二十五日印刷
第五十四卷
正月

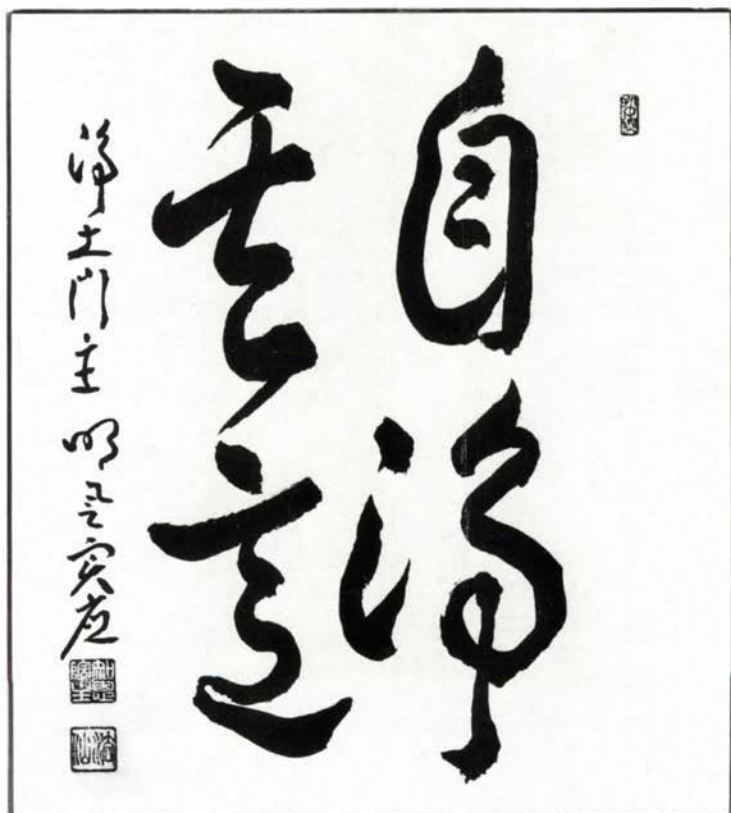


いん

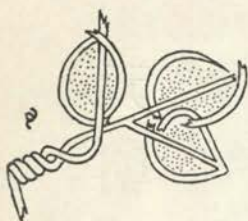


浄土門主

藤井実應



正月号



即ち食時を以て、還りて本国に到りて飯食を經行す。

——『阿弥陀經』

目次

(新)(春)(法)(話)

元朝に念仏す……………須藤隆仙……(2)

法話

浄土門の戒定慧……………村瀬秀雄……(8)

辰年史談……………細田隆善……(14)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <10>

海と山の狭間で……………木下隆一……(24)
——師走——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第43回……………寺内大吉……(31)
親縁の駅路……………挿絵 松濤 達文

表紙絵 小林治郎画

(話)

(法)

(春)

(新)

元朝に念仏す



南無阿弥陀仏。年頭にあたり、謹しんで無
量寿如来の宝号を称え奉り、新年のご挨拶と
させて頂くものであります。昭和も六十三年、
正に聖寿の万々歳であります。

しかし、世の中というものは、目出たいこ

ともあれば、目出たくないこともあります。
今日、さかんに精神文明の遅れが云々されま
すが、どうもこれは、今始まったことではな
く、いつの時代にも、これを嘆く声があつた
ようであります。

須藤隆仙

(北海道印度哲学仏教学会顧問
函館市称名寺住職)

大体がして末法思想というのがそれでありましょう。世の中が腐ってきておる、人間が腐ってきておる、さあ、これをどうしていか、というのが末法思想の正体でありましょう。末法思想といわれる宗教的危機感、浄土教を發達させる母体となりました。

明治になって西洋の物質文明が怒濤のように押し寄せてくると、そこにまた精神面での新しい危機感が生まれてきました。「今の紳士は物質的文明の知識の果実を余り多く食い過ぎたり。物質的文明の果実必ずしもそれ自身に於て有毒にあらず。然れどもこの果実は常に精神の果実と共に食せらるるを要す……現下の紳士は物質的文明の果実のみを専食して成長し、精神的文明の果実の甘味を忘れ、以て不信多方の動物となり終りたり」——。これはすでに明治三十九年に發行された『名家論叢、現今の宗教問題』という書物の中に

ある、福来友吉博士の一文であります。現今これと全く同じことが叫ばれているわけであります。

私が最近読んで、非常に感銘した本に、建築家黒川紀章氏の『共生の思想』があります。驚いたことに黒川さんは、浄土宗立の東海学園を中学・高校と出ているのであります。同学園は有名な椎尾弁匡博士が学園長であられました。黒川さんはここで椎尾先生の仏教講話を聞いて育ったというのであります。椎尾先生は周知のように、共生（ともいき）主義というものを創唱されました。黒川さんは講話の中では直接この共生の言葉を聞いた覚えはないというのですが、しかし椎尾先生の話の中味は全部「共生」ですから、黒川さんは知らず知らずのうちに、この共生主義というも

のを、すっかり身につけておられたのでしよう。今度、氏の思想の総決算ともして、「未來を生きぬくライフスタイル」と副題されて出されたこの本は、ずばり『共生の思想』であり、そのエピソードの中で黒川さんは次のように驚いて告白しているのであります。

「私は、中学・高校時代を名古屋の東海学園に学んだが、この学校は浄土宗系の学校で、江戸時代に創立され、現在でも教師の大半は住職で占められている。当時の学園長は東京・芝増上寺の管長、椎尾弁匡先生で、この椎尾先生の仏教講話を聞きながら過ごした六年間が、私の思想形成に大きな影響を与えている。そして、最近になって、『共生』という言葉が、椎尾先生によって、大正十二年に作られたものだと言った。椎尾先生は、財団法人共生会というものを作

られて活動され、『共生法句集』『共生教本』といった著書をまとめておられる。その中で、『私どもは共存の実義を体して、共生浄土の成就を念ずる者、利鈍も強弱も相携う考えです。世の中のもの、すべて周囲との考えを離れて存在しない。一切は衆縁によって生ずるものである。万物は相関連して成り立っているものである。私どもはこの原理にのっとって、一步一步と理想世界を建設していきたいと思う』と述べている。これこそ共生の真義であろう。椎尾先生の共生仏教、先生は『ともいき』と読んでおられるが、その考え方の基本は、世の中には、人間も、植物も、動物も、そして鉱物のような無機物もある。そのすべてが、生きていくと同時に、生かされていくものだと思えることにある。」

黒川さんはまた、日本の工業化と近代化とを推し進めてきた精神的バックボーンは、ヨーロッパの合理主義精神だが、しかしその合理主義精神というものは、ものを区別視する二元論が前提であり、二元論からは真の平和と共存の世界は生まれてこないと力説しておられます。即ち二十一世紀に向って将来の世界を導いていく思想があるとすれば、それは仏教の絶対不二論であり、その究極が「共生の思想」だというのであります。経済原理も都市構想も、すべて共生の思想哲学によらなければならぬというのであります。

椎尾先生は、仏教の発展は大乗にあり、大乘の究極は浄土教にあり、浄土教の真相は共生にあると主張されました。「願共諸衆生往生安楽国」といわれるとおり、「願わくは諸

の衆生と共に安楽国に往生せん」というのが念仏者の願いであります。

その願いを、おさめ成しとげて下されるのが、阿弥陀如来様であります。世の中の一切を育てはぐくんで下されるみ力が阿弥陀如来様であられ、それ故に、阿弥陀如来様をば、無量寿仏（永遠の命の仏）、無量光仏（永遠の光の仏）、無辺光仏（偏見なき光の仏）、無礙光仏（さへぎるものなき光の仏）、無対光仏（比ぶものなき光の仏）、皦王光仏（悪業を焼き尽す光の仏）、清浄光仏（罪を清めてくれる光の仏）、歡喜光仏（喜びの光の仏）、智恵光仏（真理を知らせる光の仏）、不断光仏（絶えず照らしつづける光の仏）、難思光仏（計り知れない光の仏）、無称光仏（称え切れない光の仏）、超日月光仏（日月も及ばない光の仏）などとも称し上げるわけであります。宇宙一切の育てはぐくむ力こそ、本源のみ力であります。つまり阿弥陀如来様は宇宙の

本源をいうのであり、その本源が力となって働きかけて来るその姿が、如来そのものである。そもそも如来とは、本源（如）が私たち凡夫に働きかけてく（来）る、それで如来なのであります。

如来は無数におられますが、それら無数の如来様の代表こそが阿弥陀如来様であります。第二の釈尊と称されるインドの竜樹菩薩（二五〇～二五〇頃）は、お書物の中で多くの仏様を賛えておられますが、その表現は「阿弥陀仏等の諸仏」というふうに言っておられるのであります。即ち阿弥陀仏を諸仏の王としているのであります。中国の善導大師（六一三～六八二）は『観念法門』というお書物の中で、過去の諸仏はみな阿弥陀仏を念じて成仏することを得たといっておられますが、諸仏の王を念ずるのは当然のことであります。

阿弥陀如来様を信仰の理論で申しますと、

無始無終・無相・無作・湛然常住の法性（法身）であり、四十八願成就の救済仏（報身）であり、念仏者を導く善知識（化身）（応身）であり、この法身・報身・応身の三身は三にして実は一であって、これを三身即一の弥陀法王と賛えます。その中で救済の働き、即ち宇宙一切の育てはぐくむみ力こそ、私たちに直結する仏身であられますから、報身のお姿こそ私たちが直接信仰する仏身であって、浄土宗の本尊仏は実にこのお姿であります。ただし単なる報身仏ではなく、右のように諸仏最勝の仏身ですから、法然上人様はこれを「実証の万徳を得たまえる報身如来」とお示しになられたのであります（『無量寿経釈』）。

このような最高最勝の如来様の名をお称えして、私たちは日々その大慈悲に恩浴し、さらには未来の成仏が実証されているわけがあります。正に「生けらば念仏の功積もり、

死なば浄土へまえりなん。とてもかくてもこの身には、思いわずらう事ぞなき」(法然上人御法語)の大法悦であります。

あるとき、内山興正という禅宗のお坊さんが、NHKテレビ「心の時代」で、自分は年がたってもう坐禅は難しいので、余生は念仏を称えて暮らすのだ、とおっしゃっておられました。また真言宗のお坊さんで産業医科大学講師の古川泰竜先生は、その著『死は救えるか』の中で、法然上人の『一枚起請文』こそ臨死患者に与えられた唯一の遺言状であるといわれ、「わたしはこの遺言状がある限り、もう死出の旅路に迷うことはない」といっておられるのであります。だいぶ前（あきまへ）のことです。ありますが、明治神宮名譽宮司の甘露寺受長（あきなが）氏がある宗教雑誌に、『心静かに寿を延（よ）ぶ』と

いう一文を書かれ、一番大切なことは心を平らかにすることであるといわれ、「心を静める時に、私はいつも南無阿弥陀仏と言うことにしている。だから近頃は曾孫までがその真似をして、ことごとくに南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏という。別に仏教信者の私ではないが、仏様は尊敬しているから、その言葉だけ拝借して南無阿弥陀仏を唱えるわけである。この言葉を口にする、不思議と心が静まる。何か道端の角に行っても南無阿弥陀仏すると心が落着いて、自動車の危険がなくなる」と書いておられるのであります(『大法輪』昭四十八年二月号)。

最高最勝の仏王のみ名でありますから、このように各宗の高僧や、神官さんからまで信仰され実践されているわけであります。

元朝にあたり、改めて至心念仏する次第であります。

(法)

(話)

浄土門の戒定慧

村瀬秀雄
むら せ ひで お



仏壇に米飯を盛った仏器と茶湯を供え、
灯明をともし、線香をあげます。その前
に坐って合掌し、静かに礼拝します。細
く立ち上る線香の煙をみていると、今日
もまた元気な朝を迎えることができた

いう有難さがしみじみと込み上げてきま
す。それもこれも仏さまとご先祖のおか
げであると思い、感謝の気持を披瀝しま
す。そのためには報恩のために仏の教え
に従って今日一日を無事に暮してゆきた

いという挨拶をし、その心掛けを述べるために、次のような香偈を読みあげます。「願わくは、わが身は香炉のように清くありたいものである。願わくは、わが心は智慧の火のように煩惱を焼き尽したいものである。いつも戒律を守って規則正しく暮し、心を散乱させずに集中してゆくように努めたい。こうして十方三世の仏を供養し奉る」

仏壇の中央に香炉が安置されています。香炉は祇尊当時から用いられていた大切な仏具であります。用途に従っているいろいろな形があるにしても、何れも清らかで美しい形をしています。まず第一にわが身も香炉のように常に清らかでありたいと願います。またみ仏は香の煙に乗って来臨し給うといわれています。すると香炉はみ仏をお迎えする用具ということに

なります。そこでわが身が香炉のようでありたいと願うのは、み仏の来臨を仰いで護念を蒙り、み仏の力によって清らかで美しくありたいと願うことになります。

智慧は物事を正しく見究めて惑いを断ち、悟りに至る力をもっています。また智慧は煩惱を焼き尽す力をもっているのです、これを火に喩えて智慧火といえます。わが心が智慧の火のようでありたいと願うのは、少しでも煩惱をなくすように努めてゆきいたということでもあります。足ることを知って貪る心をなくすように努め、忍耐強い心で怒る気持を押えてゆけば、物事を正しく判断してゆくことができます。

時々刻々に戒律を守っているという功德は香のように四方に薫じるので戒香と

います。戒律には様々な種類があるにしても、要するに悪を止めて善を修め、己れの心を清く保ってゆくことであります。各人がそれぞれに戒しめを守って正しく暮してゆけば、正しく明るい社会がつくられます。定は禅定のことであって、心を静めて思案し、心を散乱させずに正しく分別することにあります。事の善悪や好き嫌いという感情によって動揺する心をなくすことを定香といいます。初めにわが身は香炉のように清く美しくありたいと願ったので、その中に智慧という火をおき、戒と定との香をたき奉るのであります。

戒と定と慧を三学といって、仏道を修行する者は必ず修めなくてはならない修行であるとされています。しかし三学には聖道門の三学と浄土門の三学がありま

す、聖道門の三学は聖人の修行であって、われ等凡夫には望んでもできない修行であります。法然上人は次のように述懐しています。

「生死を重ねる世界から逃れたいと深く願っていたので、いろいろな教えを信じ、様々な修行に励んできた。凡そ仏の教えは多種多様に分れていても、結局は戒律と禅定と智慧の三学に納まらぬものはない。よくいわれている通り小乗の戒定慧があり、大乘の戒定慧がある。大乘の中でも顕教の戒定慧があり、密教の戒定慧がある。ところがわが身は戒律について一戒すらも守っているわけがなく、禅定を修めても一度として瞑想の境地に達したことがない。ある高僧が説いているには、戒律を保って身心ともに清浄にしなければ禅定の境地に入れないとしている。

しかし凡夫の心は見たり聞いたりするに従つて移り易く、決して静まることがない。例えば猿が枝から枝に飛び移っているようなものである。まことに散乱し易い心では、静かに瞑想することができない。煩惱を断つて正しい智慧を求めようとしても、どうして得ることがでざるであらうか。もし穢れのない智慧という利剣を持たないならば、どうして悪業や煩惱の絆を断ち切ることができ得るであらうか。いかに悲しんでも足らぬ思いである。いかにしたならば救われるのであらうか。ここにわれ等ごときはすでに戒定慧の三学を修める才覚を持たない者である。この三学の外に、わが心に相応した法門があるというのであらうか。わが身に堪える修行がどこにあるのであらうか。多くの学僧に教えを乞い、あらゆる修行者を

訪ねてみたが、教えてくれる者もなく、修行を示してくれる人もいなかった」
(聖光房に示されける御詞)

こうして、上人は聖道門の三学を捨てたのであります。上人が改めて経藏に入り、手を差し伸べて一書を取り出してみますと、それは善導大師の観經疏でありました。同疏には、念仏を唱えることが極樂往生できると決っている正定の業であると説かれていました。上人は、卒然として余行を捨てて、専ら念仏を唱える行者となり、浄土宗を開いたのであります。

それなら浄土門の三学はどのように考えたならよいのでしょうか。戒律を守ってゆきたいと願っていても、つい悪を犯してしまふのが凡夫の常であります。しかし悪かったと思つて念仏を唱えて懺悔

すれば罪業が減せられて、いつも身心を清く保つてゆくことができます。定については静慮したいと願つても心が散乱し、妄念が起るのも凡夫の常であります。しかし阿弥陀仏の慈悲に縋つて念仏を唱え続けていれば、心の散乱も妄念も自然にやむことになります。慧についてはこの世で悟りの智慧が得られなくても、極楽往生すれば自由に教法を聞いて、自然に智慧が得られます。このように常に念仏を唱えていれば、仏の御力によって戒定慧を修めることができます。

このように心に決めてから、十方三世にまします多くの仏に供養を捧げます。灯明をともし香華を捧げ、飲食を供えるわけですが、これは物の面から供養し奉ったのです。仏を礼拝して、偈文を唱え、經典を読誦し、仏の教えに従つて念

仏を唱えようとしていることは、心の供養であります。仏が説き給うている教法はそれぞれ違つていても、諸仏が同じように戒しめ給うていることは廃悪修善に努め、心を清く保つてゆくことであります。釈尊は八万四千の法門を明かし給うていても、諸仏が異口同音に証明し給うている法門は念仏往生の法であります。こうして念仏を唱え続けてゆくことは諸仏の教えに適うことであり、諸仏を供養し奉る行であります。

勤行の初めに香偈を唱えることは、今朝の晴々した喜びをみ仏とご先祖の前で披露し、洪恩に報謝しながら、今日もまた念仏を唱えて平穩に暮してゆきたいと願うことであります。

◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。『浄土』誌はいよいよ五十四巻に入り、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく思っています。しかし、弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して預いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところでです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

辰年史談

昭和六十三年は干支が戊辰であるので辰年といい、本年は閏年であるから二月は二十九日である。辰は十二支にあてると竜になり、十二支の他の動物は実在であるのに、竜だけは架空の動物である。辰年は昇天飛躍の年といわれている。辰は時間の上から午前八時をいい、また午前七時から九時までの二時間をいう。方角では東南東

細田隆善

(俳号・豊明)



をさす。本年は西歴一九八八年、仏誕暦では二五五四年、あと十二年で二十一世紀になり、大正以来七十七年、明治以来百二十一年である。

竜の思想は古代インドにもあったが、古代中国において発達しひろくアジア大陸にひろまり、わが国にも伝わって生活につながりを持つようになった。中国では竜王

竜神として崇敬し、春分になって天に昇り雨を降らせ、秋分になって地に下り深淵にひそむものとされてきた。中国大陸ではどこにも竜王廟があつて竜神を祀ってきたものである。竜王は九江、八河主、五湖、四海神などとも称され、河川、湖沼、大海と関連が深く、旱魃に雨を



——増上寺徳川靈廟の青銅門の竜

(この門扉は青銅の無垢・日本一)

降らせ、海上の守護神とされてきた。

竜は中国の殷の時代（紀元前千四百年）の古墳壁画に描かれ、竜の紋様を使用した青銅器が数多くあり、とくに周、漢の時代になると著しく発達し、唐以降には竜の紋様はますます盛んに使用され、中国の宮廷において数多く使用されるようになった。竜は

食卓、食器、椅子、屏風等の日常生活の諸道具の装飾にその紋様がひろく使用されてきて、中国の代表的な紋様となった。竜は頭は駱駝、腹は蛇、角は鹿、鱗は鯉、耳は牛、爪は鷹、四肢は虎、翼のあるものは蝙蝠の姿をしており、竜の爪の五爪あるものは天子、四爪、三爪のものは天子の一族、二爪一爪のものはその他一般に使用されるのが例となった。竜の種類は九つ、九竜の言葉はこれによって生れた。(一)蛟竜・鱗があつて雨雲に乗じて天に昇る竜。(二)応竜・

翼のある竜。(三)刺竜・諸竜の長で角と髯があり、雲を起して火を吐く竜。(四)蛭竜・角のない竜。(五)蟠竜・地にあつてまだ天に昇らない竜。(六)蜻竜・水中だけに住む竜。(七)火竜・火を好む竜。(八)蜥竜・鳴くことのできる竜。(九)抓珠竜・宝珠をつかんでいる竜。

中国の四神の思想も古い。四神は青竜、白虎、朱雀、玄武で、高松塚の古墳にその壁画が発見され、守護神とされてきた。青、白、赤、黒の四色の四神でもある。また



象潟蚺満寺の竜

四神旗は天皇即位式の飾り旗として現在まで使用されている。古事記によると彦火火出見命が海神の宮にゆき、海神の綿津見神の娘である豊玉姫と結婚する話があり、日本書紀や万葉集に水ノ江ノ浦島ノ子が仙人の住む蓬萊島へ行った話があり、浦島太郎と竜宮城の乙姫様の昔話は、これらの上古の話を平安時代に増補加筆されて、ひろく世に広まったものである。竜は架空の動物であるが、中国では虎を百獣の王、竜は鱗虫(魚類虫類)の王とされてきた。爬虫類の巨大な化石を見てきた

古代人は、竜の存在をかたく信じてきた。すさすじい竜巻を見た古代人は竜を想定するのによぶさかでなかった。また現存する鱗や大蛇などから竜の思想が混交育成されたものである。竜は恐ろしいものであるがやがて人を救う神として崇められるようになった。

万葉集には竜の歌はつぎの一首しかない。

虎に乗り古屋を越えて蛟竜捕り来む剣太刀もが

卷十六にあり、養老五年（七二二）治部郷になった境部王の歌である。強い虎に乗って深淵に行き竜を捕えてくれるような立派な刀があればよいがという歌である。みづちは水の霊、水の神の意味で竜のことである。まだこの頃は中国の竜の思想がわが国では十分に熟していなかったと思われる。竜の歌は夫木和歌集にもつぎの三首しかない。



——竜頭観音——

契あれば鶯の羽ふきけるはかまにも

竜の宮ひめかよひしものを

源 仲正

くちをしや雲井かくれにするたつも

思ふ人にはみゆなるものを

俊頼朝臣

雲さわぎ日かけにのぼるたつの市の

うるともなきや人を恋ひつつ

行能卿

竜王、竜神は降雨の神、慈雨の神でもあるが、豪雨や洪水を押しとどめる神であるとされてきた。金塊集につぎの一首が竜の歌である。

時により過ぐれば民のなげきあり

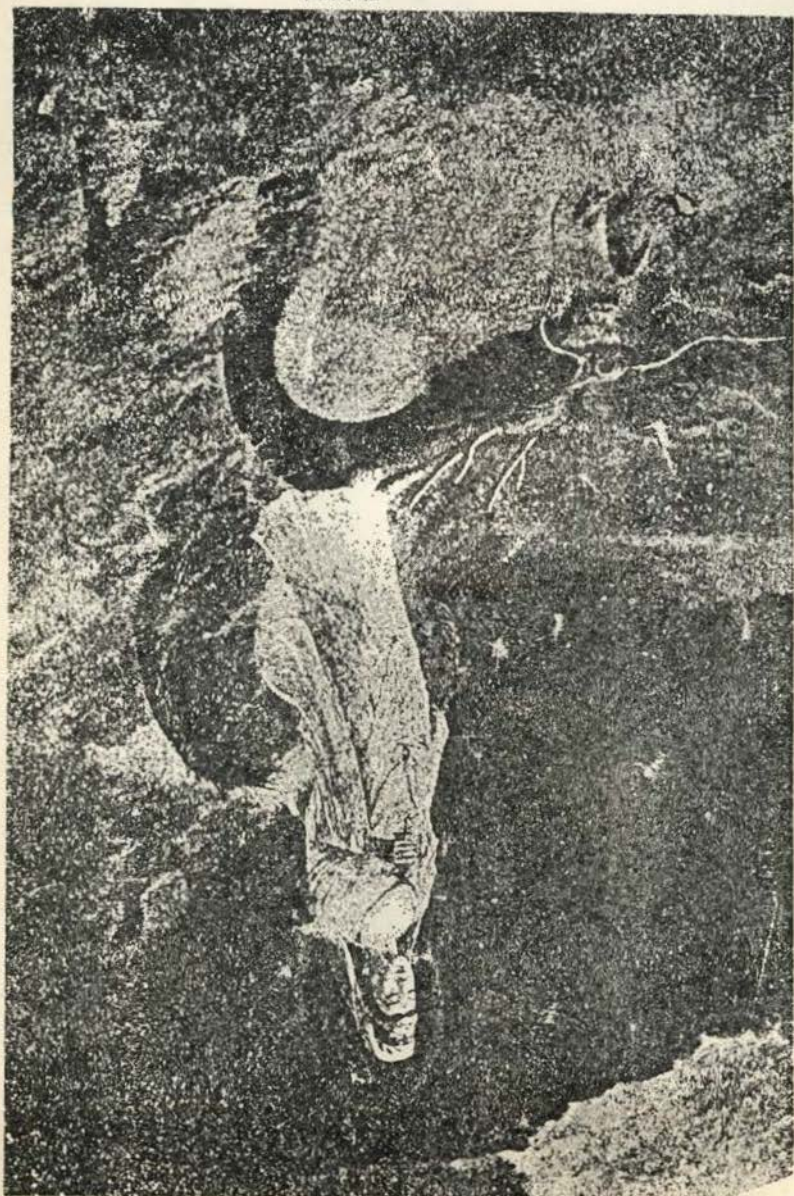
八大竜王雨やめ給へ

源 実朝

源氏物語や栄華物語に竜頭鷲首の船を浮べて、歌舞曲を奏し遊んだことが記るされている。平泉の毛越寺においてこの行事を行っている。この船は船先に竜の頭部

——(原田直次郎画・明治23年)——

——騎竜觀音——



と大鳥の頭部をあしらった船である。中国、朝鮮、日本の貨幣に竜の紋様を飾ったものが多い。また神社仏閣の建造物に竜の彫刻、紋様、絵画を飾ったものがある。竜は防火の神であり、護法の神とされてきたからである。梵鐘の釣手が竜形であるのでこれを竜頭という。京都紫野の大徳寺の山門楼上の竜の天井画は、天正十七年（一

五八九）桃山時代の長谷川等伯の名作である。日光東照宮の薬師堂の鳴竜の天井画は、焼失再建され、昭和四十五年堅山南風の作である。浅草寺（台東区）本堂の天井画は川端竜子の作品である。京都花園の妙心寺法堂の天井画は狩野探幽の名作である。竜宮造りは一つの建築様式をなし、亀腹形になった脚をふんばり中央を通路とし上を建造物としたもので、日光靈廟の皇嘉門、長崎の崇福寺山門、東京上野の不忍池の弁天堂の天竜門がこれである。

各地に竜燈松がある。夜、松の梢に火が点るものでこれは竜神が点火するといわれている。芭蕉の句にめずらしい竜燈の句がある。

五月雨や竜燈揚る番太郎

芭蕉

この句は延宝五年（一六七七）芭蕉三十四歳、初期の作品である。番太郎は各町で雇っている火の用心の人足であって、雨の降りしきる中を番

——竜図

（狩野興以画・長野県建福寺）——





——玄宗皇帝と楊貴妃の遊んだ
温泉清池園の龍の彫刻（中国）——

太郎が灯を点していると、海で燈火の点る竜燈のようだと吟じた。竜燈は海中の燐光が燈火のように連って見える現象であって、広島巖島神社の竜燈は有名である。最初は一燈、たちまち六七燈、時には三十燈、五十燈と数を増し、やがて一燈となり消えていくのである。九州有明海と八代海の沖に、陰暦八月一日前後の午前二時ごろ大小無数の竜燈が点滅して有名であり、不知火ともい



——寺院の竜の手摺り階段

(台湾)

秋の俳句季題である。不知火は景行天皇が筑紫に行幸されたときつけられた言葉で筑紫の枕詞になった。同じ年に芭蕉の竜宮の句がある。

竜宮もけふの塩路の土用干

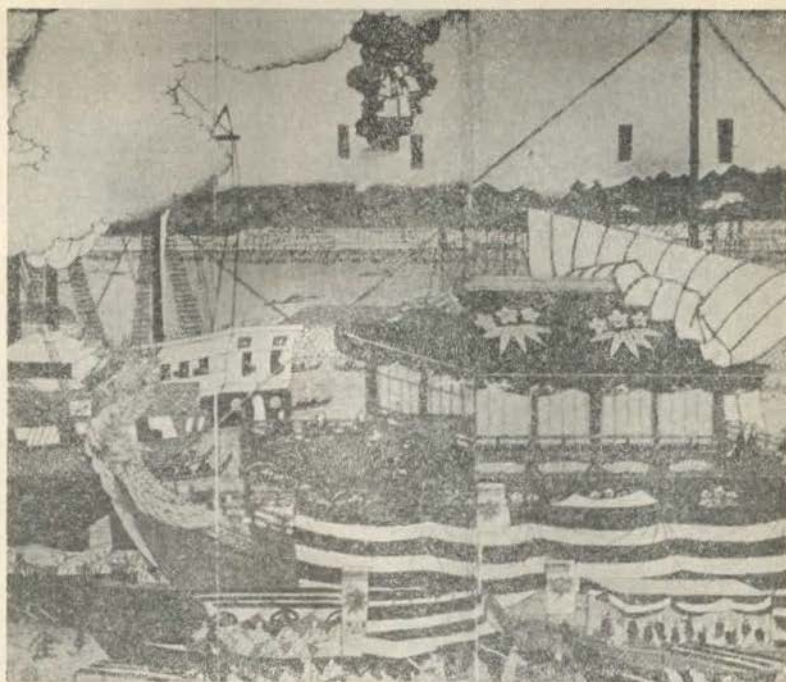
芭蕉

竜宮も今日は引き潮であるので土用干をしているので



——寺院階段の竜の装飾

(台湾)



——竜頭和船

(芳虎画・東都芝浦之風景)

あらうという句である。

仏典では竜のことを那伽といい、その長を竜王、竜神という。竜王は水中に住み雲を呼び、雨を降らすという。法華經に八大竜王のことを記し、また八歳の童女が南方成仏することが説かれている。古くインド神話の八岐大蛇の半神が仏教の中に取り入れられたものである。薬師仏の十二神将の中の安爾羅大將は頭上に竜首を置いている。辰年生れの人の一代守本尊は普賢菩薩といわれている。三十三観音の竜頭観音は竜の背に乗っていて、騎竜観音ともいう。また観音二十八部衆の難陀竜王^{なんだ}を頭上に竜首を置いている。難陀竜王は八大竜王の上首でもある。釈尊誕生のとき難陀竜王と跋難陀竜王^{はただ}が虚空から清浄水を注いだという。弘法大師が京都の神泉苑において雨乞いを行ったとき善女竜王が出現して雨を降らしたので以来各地で雨乞いを行うとき

善女竜王を雨乞いの神とした。

東京都無形文化財の大田区大森の厳正寺の水歩舞は郷土芸能であって、これは竜神に雨を止めてもらう舞楽である。長崎の諏訪神社の祭礼に造り物の竜を棒で支え練り歩く蛇踊りが有名である。また東京浅草寺の金竜の舞も竜の踊りとして知られている。奈良の興福寺の竜燈鬼は、鬼が頭上に竜燈を掲げる木彫にして鎌倉彫刻の代表作といわれているが、建保三年（一二二五）運慶の第三子康弁の作品である。近江の三井寺の梵鐘は国宝、田原藤太秀郷が竜宮へ行って竜王から贈られたものという伝説がある。俱利迦羅は黒色の竜のことで、俱利迦羅不動または俱利迦羅竜王といい、不動明王の化身という。竜王が刀剣からみつき口を開いて剣を呑まんとする姿を現している。この俱利迦羅竜が刀剣の柄に近い刀身に彫られたものがある。これは刀はみだりに抜くものではないことを教えたものである。刀を抜いてならないときに抜くから一國一城を亡ぼしてしまうこともあるのである。クリカラモンモンは刺青で竜を彫ったものいい、喧嘩をしないように本人をいましめたものである。富山石川の県境の俱利迦羅峠は、峠に俱利迦羅不動明王を祀った

祠があったからの名である。木曾義仲が火牛の計によって平家の大軍を破ったところである。

天和二年（一六八二）初代市川団十郎が初演した「鳴神」は、歌舞伎十八番の一つ「雷神不動北山姥」であるが、鳴神上人が竜神童女を滝壺に封じ込めたもので、早魃が続いた。雲の絶間姫が上人を色仕掛けで酒に酔わせ眠らせておいて、封じてあった注連縄を切って逃げた。竜神童女が滝壺から出て大雷雨を降らせ豪雨となった。上人が恐ろしい形相で姫を追いかける古劇として有名である。

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟理事
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

五月 書店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

木

下

隆

一

隨

筆

集

10

海と山の狭間で

— 走 師 —

木の
下隆
一

カレンダーを一枚めくるだけで、何となく気忙しくなる。「師走」という文字がそうさせるのだとすれば、たいした魔力を持った文字だと言うことが出来る。忙しくて先生も走り回るといった俗説は噴飯物だが、語源が分からない分だけ余計呪術的でもある。年賀葉書が売り出されて、あれこれ文案を模索しているうちに、タイムリミットは情用捨なくやって来る。よくよく考えてみると、毎年私は「師走」の文字に急がされているのではな

く、年賀状を書くという作業に急がされているのであった。

十二月も半ばを過ぎると、お節介にも郵便局の広報車が日に二度も三度もやって来て、「二十日までにお出し下さい」と気分をせっついて行く。と、私の気持ちはますます落ち込んでしまう。なぜこうも私が年賀状書きに拘わるかという、一枚一枚に新春所感めいた俳句を添えることにしているからである。この句がなかなか出来ない。理由は幾つかあるが、その最たるものは、翌年の元日の天候が全く予測出来ないから、初茜、初東雲、初明り、初日、初空、初晴、初霞、初東風、初風、御降といった気象に関する句が作れず、自ずと題材が限定されてしまうからである。昭和二十四年だったか、暴風雨に明けた年があった。朝濡れて届いた初刷には、天気晴朗の元日を謳った大家の年頭吟が麗々しく並んでいた。それを読んで、予定稿は書くものじゃないと子供心に感じてから、私は元日の気象に関する句だけは当日になるまで作らないことにしているのである。

正直言って、いまではこれがかかなり重荷になっている。今年は思い切って句作をやめてしまおうかと思度となく思ったが、「毎年あなたの俳句が楽しみで……」などと有難いお言葉を頂くと、お世辞とは思いつつも、つついその気になって呻吟することになる。

今日も今日とて、歳時記と原稿用紙を展げて炬燵で思案しているうちに、先日所用があった訪れた都心のデパートでまたまた見た、「NHKテレビきょうの料理展」の、三十年前の台所と茶の間を模したセットを思い出した。「きょうの料理」は三十二年十一月に始った最長寿番組だそうである。三十年前のいまで言うダイニングキッチンには、部屋の真ん

中にちやぶ台があり、すぐ横には白黒テレビ、そして流しのそばには七輪と炭びつが並び、ブリキのバケツや箒といった物が配された、当時の庶民の台所と茶の間の典型的なモデルであったが、いまの都会の暮らしからはこれらすべての物が消えてしまっていることに、三十年という歳月の長さを思い知らされたのであった。

私自身の生活から炭が消えたのはいつの頃であったか記憶は定かではないが、都市ガスが普及し、家屋が集合住宅化し始めた昭和三十年前後ではなかったかと思う。炭を必要としなくなれば、それに付随する物が次々に姿を消して行くのは当然で、料理用の七輪、点火用の徳用マッチ、火を熾こすのに用いた渋団扇（必ずしも渋引きの物である必要はないが）、火消壺、消炭。暖房用の火鉢、行火、火箸、灰ならし、五徳、炭斗、助炭、更に細かいことを言えば、炭俵、藁灰さえも消えてしまったのである。

なぜ、私が年賀状書きと同じくらい炭に拘るかという、伊豆に住むまで、私はコンクリートで固められた集合住宅に住んでいて、毎年秋になると、秋刀魚の塩焼が食べたくなったものだった。しかし集合住宅ではボウボウ煙を出して秋刀魚を焼く訳にはいかない。煙の出ないガスロースターがあるにはあるが、焼け具合はいま一つで、匂いが部屋に充満してどうにもならない。一戸建に住んで、誰に遠慮することなく、「あはれ秋風よ、情あらば伝えてよ、男ありて今日の夕餉にひとり……」という佐藤春夫の心境に浸るのが、私の積年の夢だったのである。従って伊豆に移って先ず最初に何をしたかというと、私は炭を買った。魚を焼くもよし、庭でのバーベキューよしと思ったからであるが、困ったこと

には肝心の七輪が見当たらない。伊東市内のスーパーや荒物屋を片っ端から当たってみたが、無い。一軒の荒物屋では、「無いでしょうなあ、ゴミ捨て場を探したって、今日び先ず無いでしょうなあ」とまで言われてしまった。そうこうしているうちに、一年目の秋刀魚の季節は過ぎて行った。以来秋が来ると、思い出したように七輪を探すのであるが、情熱が失せたせいもあって、いまだにお目にかかれず、炭は地下室で無聊を託っているわけである。

炭といえば、江戸時代伊豆は天領で、江戸城大奥の薪炭を一手に引受けていたのだそうだ。雑木に恵まれていたからであるが、代官によって厳しく規制され、妄りに伐採するのは禁じられていたという。現在も富士箱根伊豆国立公園に属しているから、樹木の伐採にはうるさい。家を建てる時やむを得ず伐った場合、種類は問わないが、同じ数以上の樹木を植えるよう義務づけられているのである。我が家の周辺には、昔薪炭用に伐られた樹木の名残があちらこちらに見受けられる。その大方は根元から二本、三本と伸びているからすぐに見分けがつく。成木を伐り倒した後切株から芽生えたオシヤマ葉が伸びて、十二、三年もすれば丁度いくらいの太さに成長する。要するにこの繰り返しで、江戸時代から伊豆の山は乱伐から守られていたのである。戦後しばらくの間は、この辺りでも炭は盛んに焼かれていたが、いまは全く顧みられることもなく、雑木は伸び放題に伸び、晩秋から初冬にかけて夥しい落葉を降らせて私を悩ましている。

不思議な現象だが、ここ一、二年炭は俄かに脚光を浴び、生産を再開した所も多いと聞

いている。しかしいずこも技術者不足と、それにも増して原料不足に頭を痛めているようである。炭焼窯を築ける人が少なくなつたのと、薪炭の需要が減るのと軌を一にして、雑木の山々を金になると勘違いして杉や檜の山にしてしまった報いが、いま来ているのである。

備長炭という硬度の高い炭は、紀州の特産として焼鳥屋や鰻屋で珍重されているが、これも原料であるウバメガシの木は、山奥の炭焼小屋よりもなお二十キロも三十キロも山奥に入らなければ入手出来ないのが現状だと、ある日のテレビは報じていた。もっとも一定以上の硬度（十五度と言ったか）があれば原料は何であれ、備長炭を名乗っていいのだそうで、紀州以外で生産された備長炭が続々登場している中で、オガクズを薬品で固め、成型して焼いた紛い、備長もあると言う。世の中には智恵者がいるものである。更に極端な例としては、インドネシアのマンガローブで造った備長炭を輸入している業者がいるというから、もう何をか言わんやである。何種かあるマンガローブの中で、一種だけが炭に適しているとかで、輸入されたダンボールの箱には平がなで「びんちよう」と書かれていた。

なぜ急に炭に火がついたかという点、日本人のグルメ志向が挙げられると、その時のテレビは解説していた。最近ではコーヒーマシンの焙煎に炭火を使用するのがはやりで、言われてみればスーパの店頭などに炭火焼と称するインスタントコーヒーマシをよく見かけるようになった。また街道筋のファミリーレストランが炭火焼ステーキという幟を競って立て始めたのも、今年になってからのような気がする。果たしてそれだけのことでグルメ志向と言え

るかどうか疑問は残るが、大量の炭を消費するのは確かである。コーヒーは原料の豆がよければうまいのは当り前、敢えて炭火で焙煎する必要があるのだろうか。それにインスタントはあくまでもインスタントである。グルメ志向と言う程のことではない。ファミリイレストランが炭火焼ステーキと気取ったところで、一流のコックが腕に撚りをかけて焼く訳ではなし、時給六百円のアルバイトのお兄さんが輸入肉を焼いているのではどうってことはない。有難がつて食っているのが馬鹿みたいなものだ。何がグルメ志向だ、そんなことで南国のジャングルまで裸にしてしまつては申し訳ないし、またぞろ貿易摩擦の火種にならないとも限らない。限りある資源はもっと大切にしたいな――。

チリチリと爪先が焦げるので目が覚めた。いつの間には堀炬燵にもぐり込んで眠っていたのであった。何だ、いままでのほんな夢だったのか、それにしては事実には即しているから鮮明だったなと首を振って眠気を払ったが、頭はぼんやりしていた。そのぼんやりした頭で、火鉢を出してみようと、ふと思った。昔親父がやっていたように、埋火をかきたてて炭を継ぎ足し、チンチンと鳴る鉄瓶から湯を注ぎ茶を喫するといった姿を真似てみようと思ったのである。しかしそれは現在では、贅沢の一種だということに思い至つて、一週間たつたいまも踏んぎれないでいる。

原稿用紙には、まだ一字も記されていない。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』正月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

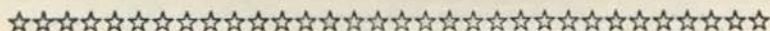
好評の『浄土』誌表紙版画絵は、再び格調高い小林治郎先生の作品を頂戴することになりました。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八―八―二 八 七



立ち止まるな善導

〈43〉

寺内大吉

挿絵・松濤達文

親縁の駅路

四

「悪い夢を見ましたね」

王徐明は、べつとりと汗で濡れた突厥人の額をぬぐってやった。

「ああ、夢だったか。苦しかった」

「どんな夢でしたか」

「それが変なんだ。わしには女がいる。お城の厨房で働いておる女だ。子供がいる。生まれて二年目、丸々と肥った可愛い男児だ」

「女の人が育てているんですね」

「うむ……その坊主のだな、まん丸い腕を斬り取って、わしは焼いて喰おうとする」

「赤ちゃんの腕をですか」



「わしとて喰いとうない。しかし、喰わねばならんように、夢のなかではなっている」

「赤ちゃんは、どうしていましたか」

「母親に抱かれ、片腕を失った姿で泣きわめいておった。それを眺めやりながら、じりじり焦げる可愛らしい腕を、手のひらまで焼いてなあ」

「食べましたか」

「いや……たとえ夢であっても喰うことなんぞ出来るものか。悪鬼の所業じゃ」

わが身を焼かれる以上に痛哭な思いだ。うめき声を発し、あぶら汗を流して悶え苦しむ。

王徐明はふと昨日の神和原を思い浮かべる。この酷使は何度か自分を処刑しようとした。その都度、思い止まった。

心の戦いがそのまま意識下へ沈澱してしまい、夢となって立ち現れてきたのであろうか。

「昨日は、なぜ殺さなかったんですか」

「……」

突厥人はむっくり起き上がったが、何も答えない。

「わたしをあわれんだのですか」

「あわれみなぞせん。わしは生まれつきの武人だ。人を殺すことだけが生きがいだった」

「それが、なぜわたしを殺さなかったのですか」

「わからん……多分、お前が草を刈ろうなどと言い出したからだと思う。それが、ここの和上のためにな」

「それがなぜ？」

「そんな生き物がこの世にいるとは知らなかった。殺すか、殺されるか、それだけだと思っていたのに」

「悪い夢は沢山見たほうがいいんです」

「苦しめ、と言うのか」

「一つ見ると人間らしさを取り戻してくるからです。善導和上はいつもおっしゃっています」

「何と言ってるのかな」

「わたしらは煩惱にまみれきっています。その欲望が夢のなかで動き出すのです。それを無理におさえこんではならない。汚れた身をぬぐおうとなぞしないで、ひたすらに五濁にまみれているから、仏よ、助け給え、とお願いせよ、とおっしゃられています」

「なるほど……」

「これまでのあなたは、そんな汚れた自分に気づこうとしなかった。夢もろくに見なかったのではないでしょうか」

「そのとおり、毎晩くたくたに疲れて眠りこけるだけだ。かりに夢を見たとしても、眼がさめると、けろり忘れてしまう」

「考えるということがなかったんですよ」

「考えても、すぐその場で結着をつけてしまふんだな。ひとに使われて、命ぜられるままに動いてきたからだ。その命令を忠実にやっていたかどうか、それだけを考えればよかった」

「それが昨日、あなたは命令にそむいた。そむいていいのかどうか考えこんだ」

「そうだった。お前を殺すのが命令だ。だがお前を眺めていると、考えこんでしまった。こんな気のいい男を殺してもよいものかどうか」

「気がいいわけじゃありませんよ」

「それなら何だ。すぐ直後に死ぬことがわかっていながら、善導和上がゆっくりお念仏できるように草を刈っておくとは」

「善導和上というお人のためではありません。仏……阿弥陀さまのためです」

「あのとき、阿弥陀さまがどこかにいたのかな」

「和上は阿弥陀さまの化身です。阿弥陀さまそのままだんです。わたしは阿弥陀さまに仕える決心をかためたんですから、善導和上にもお仕えます」

「そんな気になれるものかな」

「これが信仰、信心というものです」

「いま和上が仏の化身だと言ったな。どんな証固があるんだ」

「例えば和上も夢をごらんになる。その夢は阿弥陀さまとお話になったり、極楽浄土にお立ちになる。そんな夢ばかりをごらんになるのです」

「わしらみたいに下らん夢は見ないか」

「以前は沢山、下らない夢や苦しい夢を見たようです。それが、念仏の功がつもってきて……」

「まず悪い夢を沢山見て、苦しんで、もがいてそのあとに極楽の夢か」

「さあ、和上のもとへ参りましょう。朝餉をご馳走になるのです。それはおいしいお粥です」

「こんな山寺に、うまい粥なんぞあるのか」「ほら、和上がわたしたちのために朝餉を炊いて下さっています」

王徐明は宿房の回廊へ出て眼下の斜面を指さした。うららかな秋晴れの朝で、善導は枯

枝や落葉をかき集め、石を積んだ俄か造りのカマドに大鍋をかけて、稗の粥を炊いているところであった。食慾をそそる匂いが白煙に乗って流れてくる。

「炊きたてのお粥をご馳走になりましょう」
酷吏をうながした。

「いいのかな。あんなお偉い和上につくってもらったりして」

「稗飯に谷間の草の実を混ぜて炊いたそれは美味なお粥ですよ。和上もあなたという珍客を迎えて腕にヨリをかけているのではないでしょう」

「何の珍客のものか」

照れながらも突厥人は斜面に降り立った。

二人の挨拶に善導は笑顔でこたえた。客を饗応することを心から悦んでいる風情であった。

とろりとした甘味をふくんだ例の「虎の尻尾」を混ぜこんだ稗粥はまことに美味で、突厥人は熱気を吹き払いながら舌鼓を打った。

☆☆

朝

餉



藍草を塩漬けにしたものが、その舌先にびりりと響いて甘い粥と見事に調和する。

「山の修法は難行苦行とばかり思っていたが、和上、こんな美味な粥が食べられるなんて……」

と酷吏は讃嘆をくり返した。

「修法は楽しいものです。积尊だって難行の誤りを指摘されています」

善導の表情はあくまでもなごやかであった。病み衰えた身も忘れてしまった感じである。

五

突厥人は長安城へ帰るといふ。昼過ぎまで善導からみっちり説法を聴いたあとであった。

提案をしてきた。あの神和原まで送って来ないかという。

「神和原に、何か？」

「いろいろと相談したいことがある」

「わかった」

それが危険な誘いであることを充分に承知のうえで王徐明は快諾した。

酷吏としては、自分を処刑しなければ長安城へ帰れないはずだ。仏の道に目ざめたとは言え、任務は任務で完遂するつもりかもしれない。それも詮方ないことだと思った。もともこの突厥人に殺される運命なのである。

二人のそんな微妙な立場を知ってか知らずか。酷吏が別れの挨拶にゆくと、善導はさつき言い忘れたが、と前置きして、「観無量寿経」の散善義「上品下生の凡夫」について語りだした。

「上品下生の凡夫は、大乘という素晴らしい宝典にめぐり遇い、それを信じながら機根がなお十全ではない者を指して言います。阿弥陀仏の慈悲をうけて、西方浄土に往生できる

ことだけに満足して、つまりおのれ一身のことしかかえりみない者です。この者には還相を説き明かしてやらねばなりません」

「還相——」

突厥人は王徐明をふり向いた。どんな文字をあてるのか。善導がそれを引き取った。

「還ってくる姿です」

「還ってくる？　いったん往生を遂げた者が

……」

「迷って冥界から舞い戻るものではありません。つねに新たな願いをこめて」

「新たな願いとは？」

「西方浄土へ往生を遂げても、なおこの娑婆へ帰り来たって一人でも多くの衆生を救いたい、と発願することです。これを還相回向心と申します」

「還相回向心——」

「上品と申して善心は満ちているのですが、悲しいかな、下生の者には大乘が教える原点を説いてかからねばならない。大乘では、つ

ねに「救いの働き」が優先します。自分が救われないと思ったら、まず他人に救いの手をさしのべることです。その他人が救われたとき、自分も救われたと思うべきです。この原点から発すれば、西方浄土への往生を願った者は、かの地で仏、菩薩となり得たならば必ずこの穢土へ還ってきて大乘の働きをすることを誓わねばなりません」

そこまで語ると善導はゆっくりと合掌した。別れを告げる突厥人に優しい微笑をかけた。

還相の道——

王徐明は、突厥人と終南山を降りてゆく道を、彼なりにそう受けとめてみた。

昨夜、酷吏は善導とめぐり遇って浄土への道を発見した。だが今日は再び汚濁に満ちた長安城へ帰ってゆくという。帰るための条件には自分を処刑しなければならぬ。地獄へ舞い戻れることを意味する。

その道すがた一片でもいい。大乘の心に目

ざめさせ得れば、自分は神和原で果てるようなことがあっても還相回向を突厥人にさとし終えたことになるではないか。

さきほどまでの不安と、捨て鉢めいた諦めが払拭された思いであった。

神和原へ到着すると、もうその野づらには暮色がひろがっていた。昨日ここへやってきたのも同じ刻限だったであろう。王徐明は昨日と同じくもりと盛り理がった台地に腰をおろした。だが突厥人は登っては来ず、足もとの草原をうろつきまわっている。

「何を探がしているんですか」

「うむ……風の具合を調べておる」

「風がどうかしましたか」

「冬に向ってな、あの山からくる風がなるべく少い地点がよい」

「何のために？」

「和上のお住まいだ」

「……」

「何だ、妙な顔をして。このあたりに草庵を

造る。和上のためにそれをするのが、お前の願いなんだろう。わしが造ってやる」

「一人で、ですか」

「お前は早く山へかえって和上の身边を世話しろ。一人で充分だ。今から材を運び、壁がわりに石塊を積み上げる。十日もすれば何とか人が住めるようになるだろう。草庵をたてる場所を撰定してもらいたいのだ」

「しかし、草庵を造ったあと、あなたはどこへゆくのですか」

「どこへゆくのか……それはわからん。知らんと言ったほうがいいだろう。お導きのままだからだ」

「誰のお導きですか」

「善導和上の、いや阿弥陀さまのお導きだ」
王徐明はおのれの超越し苦勞を笑いたくなく、突厥人は立派な「願生者」になっていたのである。

「しかし、このままであなたはお城へ帰れずまい」

「うむ。天后を取り巻いておる連中が黙ってはいないだろうな」

「そのためにはわたしを処刑するしかないでしょう。いまここへ来たのもてつきりその処刑執行だと覚悟していたんです」

「情けないことを考えてくれるな。善導和上から、あれほどのお諭しをもらって、わしが以前の人殺しに戻るはずがない」

「ああ、有難いお人だ」

「おい、よせよ。そんなふうにわしを拝んだりするのは……それにつけてお前に頼みがある」

「何ですか」

台上から降りてきた王徐明は突厥人のかたわらへしゃがみこんだ。先にしゃがみこんで草をむしっていた酷吏は、耳もとへささやくように、

「草庵が出来上がったらな、わしは消え去る」

「どこへゆくんですか」

「どこだか、それはわたしにもわからん」

「西域の母国へ帰るのですか」

「母国なものか。あちらはすっかり唐人化している。かりに帰り着いたとしても捕らえられ、首を刎ねられるのが落ちだ。この国をくまなく逃げまわるだけだ。それでだ、心残りな女と赤児だ」

「どうなさるつもりですか」

「あなたに頼みたい」

「わたしに……でもわたしは出家した身ですよ」

「わかっておる。お前の妻にして欲しいと言っておるのではない。草庵とは離れて、あちらの隅っこにでも小屋を造っておく。そこへ住まわせてやってくれ」

「……」

「和上たちのお世話を手伝わせてもらえば有難い。いや……女なぞは、どうでもいいのだ。ゆきたいところがあつたら好き勝手にさせてもかまわらい。頼みたいのはその赤児

だ。何としてでも一人前に育てて、わしは善導和上の弟子にさせたいのだ」

「何をおっしゃいますか。和上は幾歳だと思えますか。もはや七十になんなんとする御高齡——それも」

「わかつておる。二歳に満たない赤児が弟子になり得ようもないわな。しかし、和上の教えを汲んだ弟子、例えばおぬしの弟子となることはできる」

「わたしとて、あと何年生きられることやら」

「それなら、お前の弟子のまたその弟子に加えてもらえばよいのだ。要するに、わしはその赤児を善導門へ入れたいのだ。ほんらいなら、わしがそれをやって、しっかりと学びたいところだが事情が許さない。和上と出遇うのが遅すぎた」

突厥人の善導への憑依ぶりが如何に深いものであったかを、今更のように思い知った。夷狄の、思想文化らしきものに浴した経験も

ない荒んだ心へ善導の念仏は、巖をつらぬきとおす雨露のように浸透し尽していったのである。

王徐明は草庵の建立地点を撰定すると、突厥人に長安城内にいる少年憚良に連繫を取るようにと指示した。

「その者も和上の弟子かな」

「少年ながら、わたし以上の弟子です。わたしなぞは彼にみちびかれて和上のお心に触れあえたのです」

「それなら安心だ」

「ことにあなたの子供さん、成育するまでわたしは存命できると思えません。憚良ならば後事を托するのに最適な人物です」

「後宮にいるのだな」

「天后の一族ですゆえ……くれぐれも注意して接触をはかって下さい」

「その点は心配無用だ。蛇の道は蛇で、欺きむいて王宮内へ潜入する方法は幾らでもある。さあ、陽も落ちたぞ。早く山へ帰れ。和

上の身が……」

「わかっています。これでお別れしますが最後にあなたのお名前を」

「わしの名前だと。唐人はそんなことが気になるのだな。これまでに四度もお前は訊いたぞ」

突厥人は屈託なく笑った。

「どうもお名前を知っていないと、あなたの実像が浮かび上がってまいりません」

「唐は文字の国か。何やら唐人名があるが、いつもわしは忘れる。そうだな、磧口の泥鬼とでもおぼえておけ」

「セキコーのデイキ？」

「磧の国のとば口に生まれた泥まみれの鬼よ」

泥鬼とは、砂漠の腐蝕した溜まり水に棲む怪魚の称であったことを、王徐明はあとで知った。

六

宋敏求の「長安志」にこんな記述がある。

——開利寺在畎南三十里皇甫村、香積寺也。

永隆二年建、皇朝太平興国三年改。

永隆二年（六八一）は善導が円寂した年次で、三月十四日六十九歳が遷葬の日とされている。

畎南三十里皇甫村は長安城の南の神和（禾）原で、そこに遺弟懷憚が中心となって香積寺を建立した。墓塔は香積寺の軸心に位置し、周廻二四歩、直上十三級（段）の規模で、上部が多少損壊はしているが、現存する。

この香積寺が、宋代になって開利寺と改称したため、前掲「長安志」の記載となったものである。

善導面受の弟子に浄業という念仏者がいた。王昶の「金石萃編」は「大唐龍興寺大徳、香積寺主浄業法師靈塔並序」で浄業の生涯を紹介する。

——法師諱象、字浄業。趙姓……嘗年慕法、弱冠辭榮、高宗忌辰方階落彩蛟、縑、七日旋登法座、觀經・疑論剖析元微、念三正因、抑揚理安……延和元年夏六月十五日試誨門賢、端坐燈祖、念仏告滅。嗚乎生歴五十有八。即以其年十月二十五日陪窆于神禾原大善導闍梨域内崇靈塔也。

弟子の浄業は善導の遺志を継承し、念仏弘道に励んだが、五十八歳で往生の素懷を遂げたとする。そして神和原にある善導墓塔の靈域内に埋葬されたのである。

この記載によって十三層の神和原靈塔が善導を埋葬したものであることを明確にし、かつその斜めの背後に建つ三層の墓塔が浄業墳

堂所である事実を物語る。この墓塔も現存している。

なぜこの神和原の地を選んだのか。「生前の善導が愛した地」という伝承だけだが、ただの散策地としてだけではなく、長安の街から終南山へ至る中継場所として晩年の善導が身を休めた草庵に似たものが実在したのであろうことが推測される。あるいは、慈恩寺の大雁塔を臨み、終南山の白雲を眺めやりながら、善導はこの神和原草庵で入寂したのかもれない。

さらに香積寺だが、前にも触れたように善導の生地、安徽省の泗洲に同名の寺があったことが念頭を占める。その香積寺は山東省にあった古刹で、幼時をその僧房で育ったとも推定される。あえて出藍の寺名を墓域に冠したのではなからうか。

それはともかく突厥人の「磧口の泥鬼」が去って十数日。王徐明はその日、終南山悟真寺に少年憚良を迎えた。

「神和原に草庵が出来上がりましたよ」

「もう出来上がったのか」

泥鬼と別れて数日後、一度立ち寄ってみたのだが、その折は四隅の柱が立っているばかりで、完成はいつのことやらまことに心もとない状態であった。

「とにかく数十名の工人を叱咤して……」

突貫工事で完成させたというのである。

「どこから連れて来たみだらう。そんな工人を」

「王宮の工人たちですよ」

「そんなことが許されるのか」

「許すも許されるもありませんよ。あの人は天后の命令だと称して強引に工人や機材を運びこんだのです」

「あとはどうなるのかな」

「どこで調達したものでかわかりませんが、おびただしい銀を工人たちや王宮の要路にバラまいたことは間違いありません」

死を賭してやってのけた仕事だった。不可

能のいうことはなかったのであろう。

「それで泥鬼居士はどこへいったのかな」

居士の名を王徐明は付与した。

「あれつきりです。屋根をふき終えた夕暮れを最後にふつとりと姿をかき消してしまいました」

「お前に何か頼んではいかなかったか」

「女のことでしょう」

「うむ。みどり児を抱えた女だが……どこに住んでいるのか」

「後宮の厨房で働いている女です。由緒正しい家柄の人のようです」

「それが何で泥鬼など……」

「くわしい事情は判明しませんが、何でもむずかしい仕事をやり遂げて、その褒美として天后からもらい受けたようです」

「むずかしい仕事か……」

それがきわどい「暗殺」であることは容易に推察できた。案外、大臣クラスの高官を殺し、その褒美として被害者の側妾でももらっ

たのかもしれない。

いずれにしても端倪すべからざる泥鬼の生
きざまではあった。そのすべてを放棄して念
仏ひとすじに余生を全うしようと決意し、さ
らには遺児を出家までさせようという。

「有難い仏縁だな」

王徐明は今更ながらに呟いてみたくなるの
であった。

師善導の様子を覗き、もの静かに念仏する
姿を確認して、憚良をせきたてて神和原へ向
った。

この前きたとき登った台地のかげに木の香
もま新しい小堂が建っている。草庵などと呼
ぶ粗末さではない。高価な材を用い、採光に
も充分に気がくばられており、病いを養う善
導にとっては快的な環境となりそうである。
「それで、あの泥鬼はどこへ行ってしまった
んでしょうね」

少年憚良は、あらためて小堂の隅々まで検
証しながら、感慨に似た言葉を洩らした。こ

れだけの仕事をやりとげながら、目的の主人
公が住まう姿を見ようともせず、功を誇ろう
ともせずに逐電した突厥人の心事をはかりが
たかったのであろう。

「どこかで生きているだろうよ。生き続けて
念仏をとなえているだろうよ」

王徐明にはその答えしかなかった。

(つづく)

◇◇『立ち止まるな善導』◇◇

Ⅱ読者感想文募集Ⅱ

◎好評の連載もそろそろ大詰を迎え
ているようです。皆様からのご感想
をお聞かせ下さい。原稿用紙に書い
てお寄せ頂ければ幸いです。

〔編集子〕

新年賀謹

埼玉工業大学

松川文豪

淑徳中学校長
淑徳高等学校長

里見達人

〒174 東京都板橋区前野町五一四一

鎮西学園理事長
鎮西高等学校長
真和中・高等学校長

上田祐規

〒802 熊本市九品寺三一一一

東山学園長

石井俊恭

〒606 京都市左京区永観堂町五一

上宮学園

理事長・学園長 鵜飼隆玄

高等学校長 鵜飼光順

〒543 大阪府天王寺区上之宮町三一六

神田寺（旧法禅寺・安良寺）

学校 真理学園・神田寺幼稚園

友松諦道

〒101 東京都千代田区外神田三一四一〇
電話（〇三）二五一八六八三〇五

法然上人降誕聖地

美作誕生寺

岡山県久米郡久米南町

電話〇八六七二八一二〇二

浄土宗宗務総長

大田秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺
慈光ビル（〇二七三）二二一四〇〇〇

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四一二二八

大原山 西福寺

鵜飼隆玄

萩市 常念寺

住職 古本光然

老隠 古本超然

華陽院住職

堀田良謙

〒420 静岡市鷹匠二一二四一八

謹賀新年

龍泉寺住職

伊東康雄

〒107 東京都港区南青山二―八―二五

本山光明寺執事長

西念寺住職

北邨謙順

〒220 〇二 南足柄市沼田三―一五

回向院住職

本多清敏

〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇

稲田稔界

おてらはみなさんのそうだんしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺

浄心寺

小池政雄

称名寺住職

須藤隆仙

〒400 函館市船見町一八―一四

電話(〇一三八)二六―五二二五

中島真哉

青山梅窓院

〒107 東京都港区南青山二―二六―三八

教安寺住職

野呂幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六―二

電話(〇四四)二二―四九四六

〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸寺

原口徳正

松庵寺内無為窟主

小川金英

〒025 花巻市双葉町六―四

仏教福祉センターよるひる銀行

正覚寺住職

楠美知行

〒030 青森市本町一―一―二二

サンガ真仏教舎本部会長

大善寺住職

裏辻賢洲

〒81-133 福岡県宗像郡福岡町松原区

新年賀謹

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四―六	圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一―四九	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二―三―一八
〒113 東京都文京区本郷一―八―三 昌清寺 住職 服部光順 電話(〇三)八一―三三七一	檀王法林寺 だん王保育園・児童館 信ヶ原良文 京都・三条大橋東詰	群馬教区長 野口善雄 〒376 桐生市本町六一―三九八 浄蓮寺	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二―四 電話(〇二八)二二一―〇八〇二	芳泉寺 なぎ 柳 楽 真 純 しん じゅん 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七―四八	光明寺住職 白幡憲佑 〒232 横浜南区庚台六六	〒440 豊橋市関屋町二二二 悟真寺 住職 立松 辨成 電話(〇五三)五二―五五六六

新年賀謹

遇斯庵主 谷地益雄 〒045 岩手県花巻市四日町一―二―四七 廣隆寺内	晴雲寺住職 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒	龍泉寺住職 瀧沢教夫 〒405 山梨市市川二―五―一
お骨仏の寺 一心寺 貫主 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六)七七―〇三七二(代)	光運寺住職 飯田信弘 〒510 四日市市中部三―一二―二	大松寺住職 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四―一―三八	新善光寺住職 太田隆賢 〒064 札幌市中央区南六条西一丁目
光心寺 北山良祐	正雲寺 〒980 仙台市新寺五―八―三七	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町二―一―一	寺内大吉

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 正月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年十二月二十五日 印刷

昭和六十三年 一月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

新年賀謹

總本山 知恩院

門主 藤井実応

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170

東京都豊島区西巢鴨三二〇一

大正大学

電話(〇三)九一八七三二一代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九一一二四一代表
通信教育部 四九一〇二三九

学校法人 大乘淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五三三七

京都市文教短期大学

学長 大橋 俊有

〒611 宇治市鎮島町八〇